

漢文

訓読の基本 ②

理解を深めるために

■学習のねらい■

漢文は、楽しく、味わいのある話が多いのですが、昔の中国語で書かれてので、「訓読法」(漢文のきまり)を知らなければ、読むこともできません。そこで、はじめに、読み方のルールである「訓読の基本」を二回に分けて学びます。今回は、その二回目です。「返読文字」・「置き字」・「再読文字」とは何かを知り、その用法について学びましょう。

* * *

「返読文字」について

漢文を読む場合は、目的語や補語に「ヲ・ニ・ト・ヨリ」などの格助詞を送り仮名として付けて、述語に返って読むことを、前回学びました。ところが、漢文の中には、「ヲ・ニ・ト・ヨリ」がなくても、下に置かれている語から返って読む文字があります。それを「返読文字」といいます。何度も出てきますので、そのたびに覚えてみましょう。次の赤字が「返読文字」です。

「少年 **易**老**学** **難**成。」 (少年**老**い**易**く、**学**成り**難**し。)

「百聞 **不**如**一**見。」 (百聞は一見に**如**かず。)

「他山之石、**可**以**攻**玉。」 (他山の石、以つて玉を**攻**く**べ**し。)

江戸時代の寺子屋では、漢文を教えるときに、「鬼と会ったら返れ。」と教えたそうです。これは、文中で、「〃ヲ・〃ニ・〃ト」という送り仮名が出てきたら、ひっくり返って読むのですよ、ということ覚えてやすいように言った言葉です。

「置き字」について

漢文に使われている漢字は、それぞれ一回ずつ読むのが原則ですが、その原則から外れるものが二つあります。その一つが「置き字」で、もう一つが次ページの「再読文字」です。



講師
渡辺 恭子

「置き字」とは、読まない漢字のことをいいます。直接は読みませんが意味はありますので、前後の文字の送り仮名に、それぞれの「置き字」の持つ意味（役割）を含ませて読みます。「書き下し文」に改めるとき、「置き字」は書きません。次の赤字が「置き字」です。

「忠言逆於耳、而利於行。」

（忠言は耳に逆らへども、行ひに利あり。）

「母以己之長、而形人之短。」

（己の長を以つてして人の短を形すること母かれ。）

「再読文字」について

訓読するとき、一つの漢字を二度読む文字のことを「再読文字」といいます。読み方は、最初に返り点に関係なく、日本語の副詞的な読みをし、さらにもう一度、今度は返り点に従って助動詞的（動詞もある）な読みをします。「書き下し文」に改めるときは、一度目はそのまま漢字を用い、二度目の読みは平仮名にするのが決まりです。

再読文字

漢字	読み方	意味
未	いまダ〜ず	否定（まだ〜しない）
且	まさニ〜（セント）す	未来（今にも〜しようとする）（〜になる）
将	まさニ〜（セント）す	うとする
当	まさニ〜ベシ	当然（当然〜すべきである）
応	まさニ〜ベシ	推量（恐らく〜であろう）
猶（由）	なホ〜（ノ・ガ）ごとシ	比較・同等（ちようど〜のようだ） （ちようど〜と同じである）
宣	よろシク〜ベシ	適当・勧誘（〜のがよい）
須	すべカラク〜ベシ	強い必要性（せひとも〜する必要がある）
盍（蓋）	なんゾ〜ザル	反語（どうして〜しないのか） 「何不」と同じ。

